

主要産地における平成29年産水稻の収穫量及び作柄概況等について 第4報（12月5日現在）

作成：公益社団法人米穀安定供給確保支援機構情報部（平成29年12月6日）

全 国 道 府 県	収穫量（主食用）					作況		品質概況等		参考			
	平成29年産 収穫量 ①	前年産収穫量 ②	前年産 との比較 ①-②	生産数量目標 との比較 ①-③	自主的取組 参考値との比較 ①-④	作況指数 (29年産)	前年産 との比較	29年産水稻 うるち玄米 1等米比率 (29年10月末現 在)	28年産水稻 うるち玄米 1等米比率 (28年10月末現 在)	生産数量目標			平成29年産 自主的取組 参考値 ④
										平成29年産 ③	前年産 との比較	増減率	
	t	t	t	t	t			%	%	t	t	%	t
全国	7,306,000	7,496,000	▲ 190,000	▲ 44,000	▲ 24,000	100	▲ 3	83.2	84.4	7,350,000	▲ 80,000	▲ 1.1	7,330,000
北海道	552,200	545,500	6,700	16,531	17,988	103	1	91.3	89.9	535,669	▲ 5,831	▲ 1.1	534,212
青森	226,500	222,300	4,200	▲ 10,794	▲ 10,149	101	▲ 3	93.2	93.3	237,294	▲ 2,583	▲ 1.1	236,649
岩手	250,500	254,300	▲ 3,800	▲ 14,932	▲ 14,210	98	▲ 4	93.4	97.8	265,432	▲ 2,889	▲ 1.1	264,710
宮城	339,700	352,300	▲ 12,600	▲ 1,493	▲ 564	99	▲ 6	84.2	90.4	341,193	▲ 3,713	▲ 1.1	340,264
秋田	398,900	409,600	▲ 10,700	▲ 9,744	▲ 8,632	99	▲ 5	91.3	91.9	408,644	▲ 4,448	▲ 1.1	407,532
山形	337,300	345,300	▲ 8,000	140	1,057	100	▲ 3	94.0	95.2	337,160	▲ 3,668	▲ 1.1	336,243
福島	328,900	333,600	▲ 4,700	▲ 3,416	▲ 2,512	100	▲ 2	93.0	95.6	332,316	1,930	0.6	331,412
茨城	348,600	350,100	▲ 1,500	18,418	19,316	99	0	93.9	92.2	330,182	▲ 3,594	▲ 1.1	329,284
栃木	273,400	295,300	▲ 21,900	▲ 18,926	▲ 18,131	93	▲ 9	95.1	94.2	292,326	▲ 3,182	▲ 1.1	291,531
埼玉	151,700	154,100	▲ 2,400	3,653	4,056	101	0	85.7	83.8	148,047	▲ 1,612	▲ 1.1	147,644
千葉	289,400	295,900	▲ 6,500	48,161	48,818	100	▲ 2	94.9	90.5	241,239	▲ 2,625	▲ 1.1	240,582
新潟	527,600	589,700	▲ 62,100	17,416	18,804	96	▲ 12	84.2	83.6	510,184	▲ 12,533	▲ 2.4	508,796
富山	181,800	191,300	▲ 9,500	105	600	100	▲ 6	91.1	90.2	181,695	▲ 1,987	▲ 1.1	181,200
石川	120,400	123,900	▲ 3,500	▲ 596	▲ 267	99	▲ 5	88.7	89.1	120,996	▲ 1,317	▲ 1.1	120,667
福井	122,300	126,300	▲ 4,000	▲ 487	▲ 153	101	▲ 3	90.5	90.9	122,787	▲ 1,327	▲ 1.1	122,453
長野	196,900	197,800	▲ 900	7,033	7,550	101	0	96.7	97.8	189,867	▲ 2,066	▲ 1.1	189,350
滋賀	155,100	161,300	▲ 6,200	▲ 1,932	▲ 1,504	100	▲ 4	72.9	76.0	157,032	▲ 1,709	▲ 1.1	156,604
兵庫	175,900	177,400	▲ 1,500	▲ 696	▲ 215	100	0	61.3	61.3	176,596	▲ 1,922	▲ 1.1	176,115
岡山	158,300	155,600	2,700	3,128	3,550	103	2	80.2	80.4	155,172	▲ 1,689	▲ 1.1	154,750
広島	123,400	124,300	▲ 900	▲ 3,801	▲ 3,455	102	0	85.6	84.2	127,201	▲ 1,384	▲ 1.1	126,855
山口	100,600	101,400	▲ 800	▲ 5,843	▲ 5,553	103	1	78.2	75.8	106,443	272	0.3	106,153
愛媛	70,600	72,100	▲ 1,500	▲ 1,745	▲ 1,548	102	0	38.8	46.0	72,345	▲ 788	▲ 1.1	72,148
高知	54,200	53,100	1,100	5,197	5,330	103	3	16.7	19.4	49,003	▲ 534	▲ 1.1	48,870
福岡	178,700	177,400	1,300	118	603	102	2	27.5	23.3	178,582	▲ 1,944	▲ 1.1	178,097
熊本	169,700	171,300	▲ 1,600	▲ 15,577	▲ 15,073	102	0	32.5	36.7	185,277	▲ 2,016	▲ 1.1	184,773
宮崎	74,900	77,200	▲ 2,300	▲ 16,706	▲ 16,457	101	1	49.2	47.8	91,606	▲ 997	▲ 1.1	91,357
鹿児島	95,300	97,600	▲ 2,300	▲ 13,404	▲ 13,108	100	0	41.3	35.5	108,704	▲ 1,183	▲ 1.1	108,408

注：更新箇所について、前報より増加した箇所は二重下線で、減少した箇所は下線で表した。

収量構成要素、作柄及び品質等の概況	
道府県	自治体等公表資料（公表資料の抜粋）
北海道	<ul style="list-style-type: none"> ・全もみ数は「<u>平年並み</u>」となった。これは、6月が低温・日照不足で経過したものの、7月には天候が回復したからである。 ・登熟は「<u>やや良</u>」となった。これは、8月上旬の多照により開花・受精が良好となり稔実が平年を上回ったこと、粒の肥大及び充実は登熟期間を通じて日照時間が平年並み以上に確保されたことに加え、9月下旬の降雨により刈り取りが遅れた結果、登熟期間が長く確保されたことから平年を上回ったためである。 ・この結果、作況指数103（10a当たり収量560kg）となった。 （北海道農政事務所 12月5日付）
青森	<p><水稲作況（収量調査）></p> <ul style="list-style-type: none"> ・黒石「つがるロマン」は、全重、わら重とも平年より重く、精玄米重は平年比109%と多収であった。玄米千粒重は平年比103%と平年よりやや重かった。また、「青木の露麗」は、全重、わら重とも前年より重く、精玄米重は前年比113%と多収であった。玄米千粒重は前年並みであった。 ・十和田「まっしぐら」は、全重は平年並みで、わら重は平年よりやや重かったが、精玄米重は平年比94%と少収であった。玄米千粒重は平年比112%と平年より重かった。 ・なお、黒石、十和田ともわら重が平年、もしくは前年より重かったのは、収穫後の不順天候により、わらの水分が高かったことも要因として考えられる。 （青森県産産技術センター農林総合研究所 11月21日付） <ul style="list-style-type: none"> ・10月15日現在における水稲の10a当たり予想収量は596kgとなり、前年産に比べ8kgの減少が見込まれる。これは、全もみ数は平年に比べ「多い」となったものの、登熟が8月の低温・日照不足の影響により、「やや不良」と見込まれることによる。 （東北農政局 10月31日付）
岩手	<ul style="list-style-type: none"> ・10月15日現在における水稲の10a当たり予想収量は533kgとなり、前年産に比べ7kgの減少が見込まれる。これは、全もみ数は平年に比べ「やや多い」となったものの、登熟が8月の低温・日照不足や9月下旬～10月上旬の低温等の影響により、「やや不良」と見込まれることによる。 （東北農政局 10月31日付）
宮城	<ul style="list-style-type: none"> ・10月15日現在における水稲の10a当たり予想収量は535kgとなり、前年産に比べ19kgの減少が見込まれる。これは、全もみ数は平年に比べ「やや多い」となったものの、登熟が8月の低温・日照不足や9月下旬～10月上旬の低温等の影響により、「不良」と見込まれることによる。 （東北農政局 10月31日付）
秋田	<ul style="list-style-type: none"> ・10月15日現在における水稲の10a当たり予想収量は574kgとなり、前年産に比べ17kgの減少が見込まれる。これは、全もみ数は平年に比べ「やや多い」となったものの、登熟が8月の低温・日照不足の影響により、「やや不良」と見込まれることによる。 （東北農政局 10月31日付）
山形	<ul style="list-style-type: none"> ・10月15日現在における水稲の10a当たり予想収量は598kgとなり、前年産に比べ10kgの減少が見込まれる。これは、全もみ数は平年に比べ「やや多い」となったものの、登熟が8月の低温・日照不足や10月上旬の日照不足等の影響により、「やや不良」と見込まれることによる。 （東北農政局 10月31日付）
福島	<ul style="list-style-type: none"> ・10月15日現在における水稲の10a当たり予想収量は549kgとなり、前年産に比べ6kgの減少が見込まれる。これは、全もみ数は平年に比べ「やや多い」となったものの、登熟が8月の低温・日照不足の影響により、「やや不良」と見込まれることによる。 （東北農政局 10月31日付）

収量構成要素、作柄及び品質等の概況	
茨城	<p>・全もみ数は、穂数がやや多く、1穂当たりもみ数がやや少なくなったことから「<u>平年並み</u>」となり、登熟は、出穂期以降、低温・日照不足がみられたものの、「<u>平年並み</u>」となった。</p> <p>・この結果、県の10a当たり収量は525kgで、前年産に比べ4kg増加した。また、作柄表示地帯別では、北部で521kg（前年産に比べ5kg増加）、鹿行で528kg（同3kg増加）、南部で530kg（同7kg増加）、西部で521kg（同2kg減少）となった。</p> <p>なお、農家等が使用しているふるい目幅（1.80mm）で選別された県の作況指数は99となり、作柄表示地帯別では、北部及び南部で99、鹿行で100、西部で98となった。</p> <p>（関東農政局 12月5日付）</p> <p><水戸市、10月26日現在> (5月1日移植)</p> <p>・「あきたこまち」は平年と比較して、稈長はやや短く、穂長はやや長かった。穂数、1穂数ならびに㎡当たり粒数は同程度であった。千粒重は重い、登熟歩合はやや低く、精玄米率は平年比96%とやや少なかった。整粒歩合は平年より3.6高かった。</p> <p>・「コシヒカリ」は平年と比較して、稈長および穂長はやや長かった。穂数は少なく、1穂数は並、㎡当たり粒数はやや少なかった。千粒重は重い、登熟歩合はやや低く、精玄米率は平年比89%と少なかった。整粒歩合は平年並であった。</p> <p>(5月10日移植)</p> <p>平年と比較して、「コシヒカリ」の稈長および穂長はやや長かった。穂数は少なく、1穂数は多く、㎡当たり粒数は同程度であった。千粒重はやや重い、登熟歩合は低く、精玄米率は平年比92%と少なかった。整粒歩合は平年より3.4%低かった。</p> <p>(茨城県農業総合センター農業研究所 11月2日付)</p> <p><龍ヶ崎市、10月25日現在> (4月27日移植)</p> <p>・「あきたこまち」の成熟期の生育は、稈長・穂長・穂数とも平年並で、倒伏程度は小さかった。収量構成要素をみると、穂数・1穂数・登熟歩合は平年並で、千粒重はやや重かったが、精玄米率は平年並（104%）だった。</p> <p>・玄米外観品質をみると、平年に比べて乳白粒が多く（+4.4%）、整粒歩合はやや低かった（-4.7%）。乳白粒が多かった要因として、出穂後20日間の平均気温が平年より高かった（+1.2℃）ことが挙げられる。</p> <p>・「コシヒカリ」の収量構成要素をみると、穂数は平年より少なく、1穂数はやや多く、これらの積である㎡当たり粒数はやや少なかった。千粒重はやや重く、登熟歩合はやや低かった。精玄米率は平年よりやや少なかった（94%）。</p> <p>・穂数が少なかった要因として、6月第3半旬～第4半旬の気温が平年より低く、葉数が少なく推移したことが挙げられる。また、登熟歩合が低かった要因として、出穂後20日間の積算日照時間が平年より少なかった（48%）ことが挙げられる。</p> <p>・玄米外観品質をみると、心白粒がやや多かった（+1.8%）ものの、整粒歩合は平年並であった（-0.8%）。心白粒が多かった要因として、出穂後20日間の積算日照時間が平年より非常に少なかった（48%）ことが挙げられる。</p> <p>(5月8日移植)</p> <p>・「あきたこまち」の収量構成要素をみると、穂数が平年よりやや多かったが1穂数が平年並であったため、これらの積である㎡当たり粒数は平年並だった。</p> <p>また、千粒重は平年並で、登熟歩合はやや低かったが、精玄米率は平年並（102%）となった。</p> <p>・玄米外観品質をみると、乳白粒がやや多く（+2.1%）、心白粒もやや多かった（+1.9%）。これらの要因として、出穂後20日間の積算日照時間が平年より非常に少なかった（56%）ことが挙げられる。</p> <p>・「コシヒカリ」の収量構成要素をみると、穂数は平年より少なく、1穂数は平年並だったため、これらの積である㎡当たり粒数はやや少なかった。千粒重は平年並で、登熟歩合はやや低く、精玄米率は平年よりやや少なかった（92%）。穂数が少なかった要因として、6月第3半旬～第4半旬の気温が平年より低く、葉数が少なく推移したことが挙げられる。また、登熟歩合が低かった要因として、出穂後20日間の積算日照時間が平年より非常に少なかった（36%）ことが挙げられる。</p> <p>・玄米外観品質をみると、乳白粒がやや多かった（+1.7%）ものの、心白粒が少なかった（-2.1%）ため、整粒歩合は平年並であった（+1.3%）。</p> <p>(茨城県農業総合センター農業研究所 11月6日付)</p>
栃木	<p>・全もみ数は、穂数が多くなったものの、1穂当たりもみ数がやや少なくなったことから「<u>平年並み</u>」となり、登熟は、出穂期の降雨や出穂期以降の日照不足の影響が大きく「<u>不良</u>」となった。</p> <p>・この結果、県の10a当たり収量は510kgで、前年産に比べ41kg減少した。また、作柄表示地帯別では、北部で527kg（前年産に比べ48kg減少）、中部で501kg（同44kg減少）、南部で494kg（同21kg減少）となった。</p> <p>なお、農家等が使用しているふるい目幅（1.80mm）で選別された県の作況指数は93となり、作柄表示地帯別では、北部で93、中部で91、南部で97となった。</p> <p>（関東農政局 12月5日付）</p>
埼玉	<p>・全もみ数は、穂数がやや多く、1穂当たりもみ数がやや少なくなったことから「<u>やや多い</u>」となり、登熟は、「<u>平年並み</u>」となった。</p> <p>・この結果、県の10a当たり収量は494kgで、前年産並みとなった。また、作柄表示地帯別では、東部で503kg（前年産に比べ1kg減少）、西部で477kg（同3kg増加）となった。</p> <p>なお、農家等が使用しているふるい目幅（1.80mm）で選別された県の作況指数は101となり、作柄表示地帯別では、東部で100、西部で102となった。</p> <p>（関東農政局 12月5日付）</p> <p><早期栽培></p> <p>・収穫作業は前線や台風等の影響により遅れ気味となった。出穂期以降の高温による高温障害の発生（品質低下）は懸念されたほどではなく軽微であった。</p> <p><早植栽培></p> <p>・8月の天候不順の影響により登熟は停滞し、収穫作業は遅れ気味となった。品質は彩のまぎな、彩のかがやきでは良好であったが、コシヒカリ、キヌヒカリ、彩のみりでは乳白粒等の発生による低下が見られた。</p> <p><普通栽培></p> <p>・登熟は9月に好天が続き順調であったが、9月中旬の台風18号から10月下旬の台風21号、22号までの間、前線の影響と相まって周期的な降雨があったことから、一部で倒伏の発生やほ場が軟弱化してコンバインが入れないなど、10月末現在で収穫作業の進捗率は最も遅れている地域で約70%、県全体で91%と（過去5年平均97%）大幅に遅延した。（農業支援課調べ）</p> <p>・全体的にはくず米が少なく品質は良好であったが、収穫作業の遅れたほ場では刈遅れによる茶米の発生、倒伏したほ場では乳白粒や穂発芽の発生等による品質の低下が見られた。</p> <p>（埼玉県農業技術研究センター 12月4日付）</p>
千葉	<p>・全もみ数は、穂数がやや多く、1穂当たりもみ数が平年並みとなったことから「<u>やや多い</u>」となり、登熟は、出穂期以降の日照不足の影響により「<u>やや不良</u>」となった。</p> <p>・この結果、県の10a当たり収量は543kgで、前年産に比べ6kg減少した。また、作柄表示地帯別では、京葉で521kg（前年産に比べ7kg減少）、九十九里で560kg（同9kg減少）、南房総で527kg（同1kg減少）となった。</p> <p>なお、農家等が使用しているふるい目幅（1.80mm）で選別された県の作況指数は100となり、作柄表示地帯別では、京葉で99、九十九里で100、南房総で102となった。</p> <p>（関東農政局 12月5日付）</p>
新潟	<p>・作柄は、全もみ数が6月上・中旬の低温等の影響により、「<u>やや少ない</u>」となった。登熟は全もみ数がやや少ないことによる補償作用があったものの、9月中旬以降の台風等の影響による倒伏があり「<u>平年並み</u>」となった。10a当たり収量は526kgとなり、前年産に比べ55kg減少した。</p> <p>（北陸農政局 12月5日付）</p>
富山	<p>・作柄は、全もみ数が田植期以降概ね高温多照で推移したことから「<u>やや多い</u>」となった。登熟は全もみ数がやや多いことから相反作用等により「<u>やや不良</u>」となった。10a当たり収量は546kgとなり、前年産に比べ20kg減少した。</p> <p>（北陸農政局 12月5日付）</p>

収量構成要素、作柄及び品質等の概況	
石川	<ul style="list-style-type: none"> 作柄は、全もみ数が6月上・中旬が低温で推移したものの6月下旬以降天候が回復したことから、「<u>平年並み</u>」となった。登熟は出穂期以降寡照傾向で推移したものの、8月下旬以降多照で推移したため、「<u>平年並み</u>」となった。10a当たり収量は519kgとなり、前年産に比べ15kg減少した。 (北陸農政局 12月5日付)
福井	<ul style="list-style-type: none"> 作柄は、全もみ数が6月上・中旬が低温で推移したものの6月下旬以降天候が回復したことから、「<u>平年並み</u>」となった。登熟は出穂期以降寡照傾向で推移したものの、8月下旬以降多照で推移したため、「<u>平年並み</u>」となった。10a当たり収量は525kgとなり、前年産に比べ10kg減少した。 (北陸農政局 12月5日付)
長野	<ul style="list-style-type: none"> 全もみ数は、穂数及び1穂当たりもみ数が平年並みとなったことから「<u>平年並み</u>」となり、登熟は、「<u>平年並み</u>」となった。 この結果、県の10a当たり収量は629kgで、前年産に比べ5kg増加した。また、作柄表示地帯別では、東信で649kg(前年産に比べ21kg増加)、南信で641kg(同13kg増加)、中信で636kg(同2kg増加)、北信で591kg(同19kg減少)となった。 なお、農家等が使用しているふるい目幅(1.80mm)で選別された県の作況指数は101となり、作柄表示地帯別では、東信及び南信で102、中信及び北信で101となった。 (関東農政局 12月5日付)
滋賀	<ul style="list-style-type: none"> 作柄は、穂数がやや多くなったものの、1穂当たりもみ数がやや少なくなったため全もみ数は「<u>平年並み</u>」となった。出穂期以降、気温及び日照時間はおおむね平年並みで経過したため登熟は「<u>平年並み</u>」となった。これらのことから、10a当たり収量は517kg(前年産に比べ17kg減少)となった。また、農家等が使用しているふるい目幅ベースの作況指数は100となった。 作柄表示地帯別の10a当たり収量は、湖南が526kg(前年産に比べ17kg減少)、湖北が498kg(同17kg減少)となった。 被害は、台風等による倒伏、いもち病及び紋枯病等が発生した。 (近畿農政局 12月5日付)
兵庫	<ul style="list-style-type: none"> 作柄は、穂数がやや多かったものの、1穂当たりもみ数がやや少なかったため、全もみ数は「<u>平年並み</u>」となった。8月以降、気温・日照時間が平年を下回る時期があったものの、夜温が低く気温日較差があったため登熟は「<u>やや良</u>」となった。これらのことから、10a当たり収量は501kg(前年産並み)となった。また、農家等が使用しているふるい目幅ベースの作況指数は100となった。 作柄表示地帯別の10a当たり収量は、県南が500kg(前年産並み)、県北が501kg(前年産に比べ4kg増加)、淡路が509kg(同8kg減少)となった。 被害は、台風第18号、第21号及び前線の停滞による降雨により倒伏被害が発生したほか、山間部を中心にシカ及びイノシシによる獣害等が発生した。 (近畿農政局 12月5日付)
岡山	<ul style="list-style-type: none"> 穂数は、中北部では5月中旬から6月中旬までの初期生育、分けつ期間がおおむね天候に恵まれたことから茎数が確保され、平年に比べて「<u>多い</u>」となった。また、南部では7月中旬の高温多照により分けつが促進されたため「<u>やや多い</u>」となり、県平均では「<u>多い</u>」となった。また、1穂当たりもみ数は、県平均、南部、中北部いずれも「<u>やや少ない</u>」となった。 これらのことから、全もみ数は、中北部では「<u>やや多い</u>」、南部及び県平均では「<u>平年並み</u>」となった。 登熟は、中北部では一時的な強い降雨による倒伏が見られたものの、登熟期間がおおむね天候に恵まれたことから、「<u>平年並み</u>」となった。また、南部では10月中旬から下旬に曇天となったものの、期間を通じておおむね天候に恵まれ、気温日較差が確保されたことにより「<u>やや良</u>」となり、県平均では「<u>やや良</u>」となった。 以上の結果、県の10a当たり収量は544kgとなり、前年産に比べ11kg増加した。作柄表示地帯別にみると、南部が552kg(前年産に比べ10kg増加)、中北部が530kg(同13kg増加)となった。 また、農家等が使用しているふるい目幅(中国地域は1.80mm)以上に選別された玄米を基に算出した作況指数は103(やや良)となった。作柄表示地帯別にみると南部、中北部ともに103(やや良)となった。 (中国四国農政局 12月5日付)
広島	<ul style="list-style-type: none"> 田植え後日照時間が長く、7月以降は高温傾向で推移したため分けつが促進され、茎数が多くなった。これに伴い穂数は「<u>多い</u>」となった。また、1穂当たりもみ数は、幼穂が形成される7月に日照時間が平年を下回った時期があったことに加え、穂数が多かったことから、「<u>少ない</u>」となった。この結果、全もみ数は「<u>平年並み</u>」となった。 登熟は、1穂当たりもみ数が少なかったことに加え、日照時間も平年を上回ったことから、「<u>やや良</u>」となった。 以上の結果、県の10a当たり収量は534kgとなり、前年産に比べ3kg増加した。作柄表示地帯別にみると、南部が536kg、北部が532kgとなった。 また、農家等が使用しているふるい目幅(中国地域は1.80mm)以上に選別された玄米を基に算出した作況指数は102(やや良)となった。作柄表示地帯別にみると、南部、北部ともに102(やや良)となった。 (中国四国農政局 12月5日付)
山口	<ul style="list-style-type: none"> 穂数は、田植え以降の好天により分けつが進み茎数が多くなったことから、「<u>多い</u>」となった。また、1穂当たりもみ数は、穂数が多かったことから相反作用が働き「<u>やや少ない</u>」となった。この結果、全もみ数は「<u>やや多い</u>」となった。 登熟は、8月は天候に恵まれたことから順調に進んだものの、9月以降は天候不順により日照時間が少なくなったことから、全体では「<u>平年並み</u>」となった。 以上の結果、県の10a当たり収量は521kgとなり、前年産に比べ9kg増加した。作柄表示地帯別にみると、東部が494kg(前年産に比べ4kg増加)、西部が530kg(同9kg増加)、長北が518kg(同12kg増加)となった。 また、農家等が使用しているふるい目幅(中国地域は1.80mm)以上に選別された玄米を基に算出した作況指数は103(やや良)となった。作柄表示地帯別にみると、東部及び長北が103(やや良)、西部が104(やや良)となった。 (中国四国農政局 12月5日付)
愛媛	<ul style="list-style-type: none"> 穂数は、分けつ期の5月から7月末まで多照で推移したことから分けつが旺盛となり、「<u>やや多い</u>」となった。また、1穂当たりもみ数は、6月下旬から7月上旬が寡照となったことから、この期間に幼穂形成期を迎えたほ場ではやや少なくなったものの、それ以外の期間は多照であったことから全体的には、「<u>平年並み</u>」となった。この結果、全もみ数は「<u>平年並み</u>」となった。 登熟は、9月中旬以降寡照で推移したうえに気温日較差が小さい悪条件であったものの、9月に入って平均気温は平年より早く低下し、10月に入っては上昇したため登熟に好適な気温が長く続いた。また、収穫期の降雨等の影響で登熟期間が長く確保でき登熟が順調に進んだことから、地帯別にばらつきはあるものの、全もみ数の「<u>やや多い</u>」東予と南予では「<u>やや少ない</u>」中予は「<u>やや良</u>」となり、全体としては「<u>平年並み</u>」となった。 以上の結果、県の10a当たり収量は508kg(作柄が良かった前年産から増減なし)となった。作柄表示地帯別にみると、東予が504kg(前年産に比べ7kg増加)、中予が538kg(同7kg減少)、南予が484kg(同4kg減少)となった。 また、農家等が使用しているふるい目幅(四国地域は1.75mm)以上に選別された玄米を基に算出した作況指数は102(やや良)となった。作柄表示地帯別にみると、東予が103(やや良)、中予が101(平年並み)、南予が102(やや良)となった。 (中国四国農政局 12月5日付)

収量構成要素、作柄及び品質等の概況	
高知	<p><早期栽培></p> <ul style="list-style-type: none"> ・穂数は、田植え後、高温多照で推移したため「多い」となった。また、1穂当たりもみ数は、6月下旬以降日照不足となったため、「やや少ない」となった。 この結果、全もみ数は「多い」となった。 ・登熟は、全もみ数が多いことや出穂期と収穫期に日照不足や台風の影響を受けたため、「やや不良」となった。 ・以上の結果、早期栽培の10a当たり収量は498kgとなり、前年産に比べ17kg増加した。 ・また、農家が使用しているふるい目幅ベース（四国地域は1.75mm）以上に選別された玄米を基に算出した作況指数は104（やや良）となった。 <p><普通栽培></p> <ul style="list-style-type: none"> ・穂数は、7月以降の気温が平年を上回ったため、「やや多い」となった。また、1穂当たりもみ数は、7月中旬から8月上旬にかけて日照時間が平年を下回ったため、「やや少ない」となった。この結果、全もみ数は「平年並み」となった。 ・登熟は、出穂期以降、9月中下旬を除いて日照時間や気温日較差がおおむね平年並みに推移したことから、「平年並み」となった。 ・以上の結果、普通栽培の10a当たり収量は435kgとなり、前年産に比べ7kg増加した。また、作況指数は101（平年並み）となった。 <p><県及び作柄表示地帯別></p> <ul style="list-style-type: none"> ・県の10a当たり収量は471kgとなり、前年産に比べ13kg増加した。 ・作柄表示地帯別にみると、中東部が490kg（前年産に比べ14kg増加）、西部が441kg（同11kg増加）となった。 ・また、作況指数は103（やや良）となった。作柄表示地帯別にみると、中東部が103（やや良）、西部が102（やや良）となった。 <p>（九州農政局 12月5日付）</p>
福岡	<p><福岡地帯></p> <ul style="list-style-type: none"> ・全もみ数は、穂数、1穂当たりもみ数ともに「平年並み」となったことから、「平年並み」となった。 ・登熟は、早生種の寒つくし等で出穂以降、高温・多照に経過したことから、「やや良」となった。 ・このことから、10a当たり収量は483kg、作況指数は「102」となった。 <p><北東部地帯></p> <ul style="list-style-type: none"> ・全もみ数は、穂数が「やや多い」となり、1穂当たりもみ数が「やや少ない」となったことから、「平年並み」となった。 ・登熟は、早生種の寒つくし等で出穂以降、高温・多照に経過したことから、「やや良」となった。 ・このことから、10a当たり収量は497kg、作況指数は「103」となった。 <p><筑後地帯></p> <ul style="list-style-type: none"> ・全もみ数は、穂数が「多い」となり、1穂当たりもみ数が「平年並み」となったことから、「多い」となった。 ・登熟は、9月以降日照不足で推移したことから、「やや不良」となった。 ・このことから、10a当たり収量は528kg、作況指数は「102」となった。 <p>以上の結果、県の10a当たり収量は509kg、作況指数は「102」となった。</p> <p>（九州農政局 12月5日付）</p>
熊本	<p><県北地帯></p> <ul style="list-style-type: none"> ・全もみ数は、穂数が「多い」となり、1穂当たりもみ数は「やや少ない」となったことから、「やや多い」となった。 ・登熟は、9月中旬以降日照不足で経過したことから、「やや不良」となった。 ・このことから、10a当たり収量は537kg、作況指数は「101」となった。 <p><阿蘇地帯></p> <ul style="list-style-type: none"> ・全もみ数は、穂数が「多い」となり、1穂当たりもみ数は「少ない」となったことから、「やや多い」となった。 ・登熟は、コシヒカリ等の作付が多く、登熟期となる7月下旬以降の天候に恵まれたことから、「やや良」となった。 ・このことから、10a当たり収量は526kg、作況指数は「105」となった。 <p><県南地帯></p> <ul style="list-style-type: none"> ・全もみ数は、穂数が「多い」となり、1穂当たりもみ数は「やや少ない」となったことから、「やや多い」となった。 ・登熟は、9月中旬以降日照不足で経過したことから、「やや不良」となった。 ・このことから、10a当たり収量は523kg、作況指数は「103」となった。 <p><天草地帯></p> <ul style="list-style-type: none"> ・全もみ数は、穂数が「やや多い」となり、1穂当たりもみ数が「やや少ない」となったことから、「やや少ない」となった。 ・登熟は、早期栽培の登熟が良好であったことから、「やや良」となった。 ・このことから、10a当たり収量は451kg、作況指数は「103」となった。 <p>以上の結果、熊本県の10a当たり収量は527kg、作況指数は「102」となった。</p> <p>（九州農政局 12月5日付）</p>

収量構成要素、作柄及び品質等の概況	
宮 崎	<p><早期栽培></p> <ul style="list-style-type: none"> ・全もみ数は、種数が「やや多い」となったことから、平年に比べ「やや多い」となった。 ・登熟は、7月上旬以降、おおむね天候に恵まれたことから、「やや良」となった。 ・このことから、10a当たり収量は494kg、作況指数は「103」となった。 <p><普通栽培></p> <p>(広域沿海地帯)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全もみ数は、種数が「平年並み」となったが、7月下旬から8月中旬にかけての日照不足等の影響で1種当たりもみ数が「やや少ない」となったことから、「やや少ない」となった。 ・登熟は、全もみ数が「やや少ない」とよる粒の肥大を見込んでいたものの、9月中旬以降日照不足で経過したことから、「平年並み」となった。 ・このことから、10a当たり収量は467kg、作況指数は「99」となった。 <p>(広域霧島地帯)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全もみ数は、種数が「平年並み」となったが、7月下旬から8月中旬にかけての日照不足等の影響で1種当たりもみ数が「やや少ない」となったことから、「やや少ない」となった。 ・登熟は、全もみ数が「やや少ない」とよる粒の肥大を見込んでいたものの、9月中旬以降日照不足で経過したことから、「平年並み」となった。 ・このことから、10a当たり収量は525kg、作況指数は「99」となった。 <p>(西北山間地帯)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全もみ数は、種数が「やや少ない」となり、7月下旬から8月中旬にかけての日照不足等の影響で1種当たりもみ数が「やや少ない」となったことから、「やや少ない」となった。 ・登熟は、9月中旬以降日照不足で経過したものの、全もみ数が「やや少ない」とよる補償作用と、出穂期から登熟盛期にかけて高温・多照に経過したことから、「やや良」となった。 ・このことから、10a当たり収量は479kg、作況指数は「100」となった。 <p>以上の結果、宮崎県の普通栽培水稲の10a当たり収量は503kg、作況指数は「99」となった。</p> <p>(九州農政局 12月5日付)</p>
鹿 児 島	<p><早期栽培></p> <ul style="list-style-type: none"> ・全もみ数は、種数、1種当たりもみ数ともに「やや多い」となったことから、「多い」となった。 ・登熟は、降雨等により一部地域で不稔もみが発生したものの、登熟期全般が高温・多照で経過し粒の肥大や充実が良好であったことから、「やや良」となった。 ・このことから、10a当たり収量は472kg、作況指数は「107」となった。 <p><普通栽培水稲の10月15日現在の作柄概況></p> <p>(薩摩半島地帯)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全もみ数は、1種当たりもみ数が「やや少ない」となったが、種数が「多い」ことから、「多い」となった。 ・登熟は、全もみ数が多いことによる相反作用と9月中旬以降日照不足で経過したことから、「やや不良」となった。 ・このことから、10a当たり収量は496kg、作況指数は「100」となった。 <p>(出水薩摩地帯)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全もみ数は、1種当たりもみ数が「平年並み」となったが、種数が「多い」となったことから、「多い」となった。 ・登熟は、全もみ数が多いことによる相反作用と9月中旬以降日照不足で経過したことから、「やや不良」となった。 ・このことから、10a当たり収量は503kg、作況指数は「100」となった。 <p>(伊佐始良地帯)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全もみ数は、種数が「やや多い」となりましたが、1種当たりもみ数が「やや少ない」ことから、「やや少ない」となった。 ・登熟は、9月中旬以降日照不足で経過したことから、「やや不良」となった。 ・このことから、10a当たり収量は496kg、作況指数は「97」となった。 <p>(大隅半島地帯)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全もみ数は、種数が「平年並み」となり、1種当たりもみ数は「少ない」となったことから、「少ない」となった。 ・登熟は、9月中旬以降日照不足で経過したものの、全もみ数が少ないことによる補償作用から、「平年並み」となった。 ・このことから、10a当たり収量は458kg、作況指数は「94」となった。 <p>以上の結果、県の普通栽培水稲の10a当たり収量は490kg、作況指数は「98」となった。</p> <p>(九州農政局 12月5日付)</p>

注1：自治体等公表資料については地方自治体及び出先機関等が公表している資料から抜粋、日付は公表日。

注2：農政局が公表している資料の「前年度比」は、確定値との比較となっている。

注3：更新箇所については下線で表した。

参考資料

平成29年産水陸稲の収穫量(農林水産省、農林水産省農政局、北海道農政事務所)、
平成28年産水陸稲の収穫量(農林水産省、農林水産省農政局、北海道農政事務所)、
平成29年産水稲の作付面積及び予想収穫量(10月15日現在)(東北農政局)、
平成29年産米の農産物検査結果(速報値/平成29年10月31日現在)(農林水産省)、
平成28年産米の農産物検査結果(速報値/平成28年10月31日現在)(農林水産省)、
平成29年産米の都道府県別の生産数量目標等(農林水産省)、
平成28年産米の都道府県別の生産数量目標等(農林水産省)、

H29水稲作況(成熟期)(青森県 11月21日)、
農研速報 水稲の生育状況(10月25日現在、水戸市)(茨城県農業総合センター 11月2日)、
農研速報 水稲の生育状況(10月25日現在、龍ヶ崎市)(茨城県農業総合センター 11月6日)、
平成29年産水稲の作況概況(埼玉県農業技術研究センター 12月4日)